

2007年8月11日

新潟県中越沖地震

「被災住宅相談キャラバン」に参加しました

(社)東京建築士会 青年委員
関東甲信越ブロック青年協議会理事
荳司 和樹

新潟県中越沖地震 被災地住宅相談キャラバンに参加してきました。住宅相談キャラバンとは、あらかじめ指定される市役所等の相談所において、被災された住民の方達からの住宅相談に応じるものです。相談されてくるのは、ほとんどがお年寄りの方達でした。実際に建物の被害状況を見てみなければ対応できないため、相談に来られた方と一緒に現地へ赴き、建物の被害状況を確認し、処置方法等のアドバイスを行います。とりわけ一人暮らしのお年寄りの方達が多く、対応を重ねるに連れ、胸が締め付けられる思いがしました。それは、今回の住宅相談キャラバン隊に参加したほとんどの建築士達が皆、痛感したことではないでしょうか。また、建築士となって以来、これほど一般住民の方に頼られたこともありませんでした。「頼られる」というより、「すがられる」という表現の方が適切かもしれません。建築士というよりは、医師になったような緊迫感を感じました。今後のためにも、キャラバン隊に参加した建築士達は、その内容を報告する義務があると考えております。新潟県と東京都は、関東甲信越ブロックとして同じブロックで活動している間柄でもありますので、関東甲信越ブロック青年協議会として、9月8日に予定されている全国大会（北海道大会）に向けて、なんらかの発表を行うべきと強く思いました。



西山地区対策本部

当日は、東京を朝4時に出発し、朝7時半に柏崎市役所近くの集合場所に到着。山梨建築士会チームや、個人参加の方達と共に、各チームに別れて指定された市内相談所へ移動。僕のチームは、はじめ柏崎市北条地区に派遣されました。北条地区の地区センターが相談所として用意されており、そこで住宅相談を開始。相談にこられた年配のおじいさんと共に、お宅を拝見。徐々に判明してくるのですが、この辺りは直接基礎ではなく、置き基礎（柱脚の下に置石を据えただけの基礎）が多いのです。その後、見て回った住宅も全て置き基礎でした。最も症状として多いのが、地震による液状化などが原因で、地盤が部分的に沈下し（全体的に沈下してくれればよいのですが...）、そのため一部の柱が沈下（最大5センチ程度）。それに伴い軸組全体が歪んでしまい柱梁接合部に隙間が生じたり（最大1センチ程度）、壁と柱の間に隙間が発生（最大2センチ程度）し、仕上げが剥落、また、玄関等の建具の開閉が出来なくなっているケースです。建物自体が歪んでしまっている訳ですから、お年寄りにとっては、たまりません。とりわけ一人暮らしのお年寄りは、余震に怯え、先のことが不安でいたたまれないのです。ペンションと潰れてしまうことはないだろうか？、立て直さなければならぬのか？、仮設住宅の入居を申し込んだが受け付けてもらえるのか？、勝手に修理を進めてしまってもよいものなのか？その場合、補助金等の申請に問題が生じないか？、大工さんをお願いしても、一向に直しにきてくれない。信用できる施工業者を紹

介してもらえないか?、修理にはいくらぐらいかかるのか?などなど。相談要素は尽きません。

まずは安心させてあげること。

それこそが今回の任務の趣旨であると痛感しました。もちろん、何の根拠もなく「大丈夫です。」なんて説明はできません。目視による判断しか出来ないため、論理的かつ、客観的な説明を心がけました。ただし、主観的な判断にもとづいた対応は避けるようにと通達されているため、杓子定規の説明しか出来ない状況に建築士として歯がゆさを感じたことも事実です。

今回も参加して本当によかったと思いました。というのも、震度6の地震で建物がどのような被害を生じるのかを体感することができたからです。また、(社)新潟県建築士会や、(社)東京建築士会の諸先輩方と2人1組で回っていったのですが、「こういう場合は、ジャッキアップで修復できるんだ。」だとか、「こういう場合は、修復に坪3.5万くらいかかる。」だとか、「地盤改良する場合は、こうやってベントナイト溶液を注入するんだ。」などと建築的知識を教わりました。

今までは設計者として、建物を新しく作り上げることしか考えていませんでしたが、今回の体験を通じて、罹災した場合の修復方法にも配慮して建物を計画せねばならないことの重要性を思い知らされました。